

「レトリック的観点から見た社会運動の分析 ——方法論の考察」

五 島 幸 一

一個人またはある特定の出来事に対しての伝統的なレトリック批評から、多数の集団員または長い期間を分析の対象とする社会運動のレトリック批評に焦点が当てられてきた近頃であるが、その分析の方法論においては様々なものが存在し、かなり異なっているものもある。その要因の一つとして、「レトリック」に対する定義そのものが各方法論において異なっていることが原因であると考えられる。そのため運動あるいは社会運動の分析においては画一された方法論がいまだもって出てきていないのが現状である。

また単一の“speaker”または“speech”に焦点を合わせた従来の伝統的なレトリック批評では、社会運動の動的な面をとらえることができない。このことを明確に表しているのが、Dan F. Hahn and Ruth M. Conchar の発表した“Social Movement Theory: A Dead End”¹⁾であり、その論文では社会運動の分析を伝統的な枠組みである“ethos,” “logos,” “pathos”と“style”の観点から検討し、その結果として社会運動のレトリック批評は従来の nonmovement group のレトリック批評となら根本的な差異はないと主張して、社会運動の分析についてはレトリックの新しい批評理論は必要ではないとしている。さらに、「運動」という概念はあくまでも社会学の領域におけるものであって、そのような現象が社会学理論を要求しているとしても、そのことがレトリック批評理論を要求していると考えることが間違っていると結論づけている。しかしここでの問題点は、ただ単に社会運動が従来のレトリック批評からでは分析できないという理由であまりにも慌てて解決しようとしてしまっている。

本研究では現在社会運動の分析において広く使われている三つの方法論——Historical Approach・Functional Approach・Dramatistic Approach——を取り上げて、各々の方法論について次の観点から検討していく。

- (1) 基本的な枠組み
- (2) レトリックの役割
- (3) 分析の中で現れてくる運動のタイプ

そして、本研究で考察した31編の論文を各アプローチ別に分類し、その中で批評理論の研究と実戦研究を区別し、年代順に配列した。

I. 歴史的アプローチ (Historical Approach)

前述のような方法論を調べていくにあたり、まず最初に社会運動に目を向けさせ、その分析の批評理論をレトリックの分野でも必要であると提唱して、ある方向づけを打ち出したのがこ

の歴史的アプローチであり、その先鞭をつけたのが1952年に発表された Leland Griffin による“The Rhetoric of Historical Movements”²⁾である。

1. 基本的な枠組み

この歴史的なアプローチが従来の伝統的なレトリックと異なる点は、分析の枠組みとして歴史に焦点を当てて、歴史という時間的な枠の中で社会運動をレトリックの観点から考察していくことにある。つまり、過去の出来事または事件等の発生の連続性（時系列的配置）を描写し、そしてその文脈（context）において付随して起こる出来事の原因と結果を分析するものであるとしている。その考え方の根底には、運動はあくまでも歴史の中で起こるものであり、常に「時」とは密接な関係をもつ（time-bound）という前提がある。

具体的には、一つの運動に焦点を当てて、発生から終わりまでを分析し、その中で運動の発達段階を明示し、各段階ごとのレトリックを調べていこうとするものである。この点で、Griffin は運動の発達段階を三つの段階——“inception”・“rhetorical crisis”・“consummation”——に分けて、それぞれの段階での特有なレトリック行為を指摘している。そしてここで重要なのは、運動の発達段階をどのように区分するかということではなく、運動のライフサイクルを通して顕著に現れてくるレトリック行為がどのような段階と密接な関係にあるのかを検討していくことである。

また、この歴史的アプローチで次に重要な点として、「対抗運動」の指摘が挙げられる。これは、ある運動が起こると必ずそれに対抗する運動が登場してくるということを前提として、各々の運動間の相互作用も運動の発達にあわせて分析していく試みである。これに関しては、歴史的アプローチを採っている他のレトリック学者も一応支持している様子である。例えば、アメリカ南北戦争に関してのイギリスにおける北部支持運動を分析した James Lennon の論文の中でも支持運動と反対運動間の相互作用も考慮に入れている³⁾。彼の論文では、イギリス国内でのアメリカ北部及び南部をそれぞれ支持しようとする運動——“pro-Northern” and “pro-Southern”——を取り上げて、各々の運動の行為をレトリック観点から眺めている。さらに、運動における speaker または leader として“London Emancipation Society”等の組織の行動にも焦点を当てたことでは伝統的なレトリック批評とは異なっている。

しかし、この歴史的アプローチでは、分析の基本的枠組みがしっかりと確立されていないのも事実である。これは、歴史的アプローチ自体が理論を作り出すには消極的であるのも原因であるし、またある出来事と別な出来事との因果関係が明示されないことも一つの原因である。

2. レトリックの役割

運動が発達していく過程での“discourse”を、より大きな時間の流れの中で捉えていくことが大切であり、過去の出来事または事件がどのような文脈（context）で起こり、それが人々にとってどのようなレトリック的意味をもたせるようになるのかに焦点を当てるものである。言い換えれば、ある特定の出来事の結果が重要な問題となってくるのである。そして、必然的に運動の発達段階およびコミュニケーション・チャンネルに強調が置かれるようになる。

運動の発達段階におけるレトリックの役割とは各々の段階におけるレトリック作戦

(rhetorical strategies) を示すことであり、具体的には James Andrews による “The Passionate Negation: The Chartist Movement in Rhetorical Perspective” の論文の中で明確に表されている。このチャーティスト運動の分析の中で彼は “rhetorical perspectives” と称して、レトリック作戦の観点から運動を次の四つの段階——(1) rhetorical imperatives, (2) strategic indicators, (3) patterns of advocacy and reaction, (4) influential relationships——に分けている。そしてこのようなレトリック観点から、歴史の枠組みの中でのレトリック的意味を明らかにしたり、歴史の文脈の中で知覚された出来事がどのように理解されるのかを示している⁴⁾。

このようにレトリック作戦を重要視する上で、不可欠になってくるのはそのメッセージをながすコミュニケーション・チャンネルの問題が挙げられる。具体的には、前述の James Lennon の論文で、彼は運動の推進のためのコミュニケーション・チャンネルとして “the popular platform” および the Nonconformist pulpit” が重要な役割を果たしたと分析している⁵⁾。

これまで見てきたように歴史的アプローチを枠組みとして運動を分析する上で大切になってくるのは、次の質問にいかにか答えられるのかに関わってくる。

(1) どのような状況がレトリック行動を刺激するのか。

(2) 数多く考えられるレトリック行動の中から、どのようなレトリック的行動が取られるのか。

これで明確にされるように、歴史という時間的な枠の中で現れてくるレトリック作戦がどのような状況と密接な関係にあるのかという事に焦点を当てて、そこで顕著にされる時間的状況とレトリック的行動との因果関係を見ていくのである。しかし、この場合のレトリック作戦とはあくまでも運動推進者いわば運動のリーダー達の側から知覚された状況に対する反応であるにしかすぎないという批判からは逃れられないが、この点に関して、Andrews は出来事とか事件は「大衆による現象の解釈」を調べていくことが大切であると指摘している⁶⁾。

3. 運動のタイプ

分析として、ある歴史的な文脈の中での特定の人物または出来事及びそれらが発するメッセージにだけ注意が向けられてしまうので、運動のタイプとしては “speaker-message” 志向になってしまう。これはある状況が別の状況を誘発することに焦点を合わせるこの歴史的アプローチでは、どうしても状況を左右する画期的な人物または出来事に目が向けられてしまうので、広い意味での “speaker” に焦点が当てられてしまう。そのため、前に述べた通り、運動の推進者側から見た運動になってしまい、運動の参加者達からの反応または参加者同志間での運動に対する意味の解釈が説明されていない。

II 機能的アプローチ (Functional Approach)

前に述べた歴史的アプローチに対して、あまりにも衝動的な出来事、人々または作戦に心が捕らわれてしまっているという理由から、もう少し実践的な理論的枠組みを適用しようとしたのが機能的アプローチ (Functional approach) である。この機能的アプローチとは、Charles

Stewartの言を借りると、レトリックを“as the primary *agency* through which social movements perform necessary *functions* that enable them to come into existence, to meet opposition, and perhaps, to succeed in bringing about (or resisting) change.”⁷⁾とみなす概念である。また、これまでの社会運動に対するアプローチは微視的であると批判して、巨視的なアプローチを取るよう主張して、他分野からの理論の援用を認めている。この背景には、伝統的なレトリック批評または以前に現れた歴史的アプローチが社会運動の分析に対してあまりに進歩を示していないという事実、とくに理論的枠組みにおいてはその傾向が顕著に現れているという批判がある。これは、歴史的アプローチでは理論的な枠組み作りには消極的である事実もかなり影響を与えている。

1. 基本的な枠組み

前述のように社会運動を存在させたり、または変化をもたらせたりするのはすべて「機能」(Functions)の問題であると指摘して、この「機能」自体は、社会運動であろうが単なる集合体 (collectivities) であろうがその違いはないとしている。つまり正規の集合体 (formal collectivities) の「機能」が社会運動にもそのままあてはまるという前提に立っている。それでは、社会運動も単なる集合体と同一視しているのではないかという疑問が出てくるが、ここでは「機能」だけはおなじであり、大きな違いはその「機能」の充足の異なる点にあるとしている。この考え方は、機能的アプローチが「運動」の概念を社会学から借り入れていることから派生している。このことを明確に表しているのが、社会運動を“uninstitutionalized collectivities”と呼んでいることにある。つまりこの根本には、人間はあくまでもある組織の一員であるという社会学の概念が息づいているからである。

この機能的アプローチを提唱している Charles Stewart は、機能的アプローチのモデルを提示する際のいくつかの注意点を挙げているが、それについて多少なりとも疑問が残る⁸⁾。一つには前述のように、単なる集合体と社会運動との違いは「機能」を充足させる度合いとしているが、この点は不明確であり、どの「機能」においてどの程度の充足度が集合体と社会運動を区別するのかが明示されていない。二つ目には、「機能」の充足と運動の時系列的発達とは直接的なつながりはないと述べ、その理由として、運動に付随して起こる様々なキャンペーンや組織団体のライフサイクルが運動のライフサイクルとは一致しないことを挙げている。これは自明のことであり、運動のライフサイクルと組織団体のライフサイクルを同次元で扱うこと自体が誤りである。運動に付随するキャンペーンや組織団体を個々に見ていく事が重要ではなく、運動の活性化とのつながりという大きな枠組みの中で捉えていくことが大切である。

これに見られるように、「機能」とは運動が維持されていく「過程」(process)を意味し、いかにこの「機能」を充すのかに焦点が当てられる。そしてこの機能的アプローチでは社会科学に頼る点が多いが、社会科学の目的とレトリックの目的を混同してしまう恐れが出てくる。例えば、社会学の目的とは社会運動の原因を探ったり、社会運動が発達していく過程で、ある構造から別の構造に変形するような構造の変形に目が向けられるので、そのことを念頭に置いておかないとレトリックの目的そのものを見失ってしまう。

2. レトリックの役割

機能的アプローチにおいてレトリックは運動における「機能」を充足させる過程であり、対象とされる聴衆の知覚に影響を与える言語又は非言語の操作の過程としてみなされる。前に紹介した Smith and Windes による論文“The Innovational Movement”では次の三つのレトリック的機能——(1)運動は他の価値を否定しない、(2)現状を維持していくためには新しい計画が必要である、(3)運動は“scene”の一部と戦うものである——を打ち出して、その中でいかにレトリックによってそれらが充されていくのかを分析している⁹⁾。また Herbert W. Simons は、Rhetorical Requirements と称して次の三つの大きな枠組みの「機能」を提示している。

1. They must attract, maintain, and mold workers (i. e., followers) into an efficiently organized unit.
2. They must secure adoption of their product by the larger structure (i. e., the external systems, the established order).
3. They must react to resistance generated by the large structure.¹⁰⁾

さらに、社会心理学の観点からこの「機能」を表している Bruce E. Gronbeck は、前述の歴史的アプローチに見られる Griffin の運動の発達の区分を利用して六つの「機能」を明示している。

- I. Inception Phase—(1) Defining (2) Legitimizing
- II. Rhetorical Crisis Phase—(3) In-gathering (4) Pressuring
- III. Consummation Phase—(5) Compromising (6) Satisfying¹¹⁾

このように様々な分野の助けを借りて、「機能」を表しているのが機能的アプローチの特徴である。そして運動の分析の助けとなる「機能」の提示は明らかに研究者自身に関わってくるが、その「機能」はあくまでも運動の構造上のまたは発達段階の形態上の目安であり、そのもの自体がレトリックであるといったような考えとは混同しないことが注意すべき点である。言い換えれば、様々な運動における「機能」を出して、その「機能」がどのように充足されるのかを見ていくのはいいが、それと同時にその「機能」を充足させるレトリック行為またはレトリック作戦 (rhetorical strategies) が何故出現し、それに対して支持者と反対者の“argument”がどのようなものであるのかを提示し、運動の発達を理解する事が重要になってくる。

3. 運動のタイプ

この機能的アプローチは分析する運動のタイプを規制することもなく、また分析の結果として表された運動がある特徴を示すものでもない。むしろ、社会学からの概念の影響が大きいこの機能的アプローチでは運動のタイプは社会学で示される「価値志向運動」および「規範志向運動」である。価値志向運動とは、社会学者の Neil J. Smelser によれば、“a collective attempt to restore, protect, modify, or create values in the name of a generalized belief”であり、規範志向運動とは、“to attempt to restore, protect, modify, or create norms in the name of a generalized belief”と定義づけている¹²⁾。この社会運動の概念を明確に打ち出しているのが Smith と Windes による“The Innovational Movement”であり、この運動は既存の価値とか社会秩序を破壊しないような変化を求める運動と定義づけて、規範志向運動と同一視してしまっている¹³⁾。

また Leslie G. Rude も、彼の扱った社会運動の分析の論文の中ではやはり農民による州所有の穀物倉庫の建設の法案の通過を目指す規範志向運動を例に挙げている。¹⁴⁾このような規範を求める運動とは異なった価値志向運動を前提にした社会運動を対象にしているのは、Herbert Simons であり、彼は焦点を reformist and revolutionary movements” に合わせていると主張している。¹⁵⁾このように機能的アプローチでは、社会運動の構造上からの運動の概念を援用して、運動のタイプとしての分類が他のアプローチとは異なっている。

Ⅲ ドラマティズムのアプローチ (Dramatistic Approach)

これまで見てきた歴史的アプローチ及び機能的アプローチとは相入れないアプローチがドラマティズムのアプローチであり、その理由としてはレトリックそのもの自体に対する考え方の違いに由来する。歴史的及び機能的アプローチにおいてはレトリックはある枠組み、ここでは社会運動という枠組みの中で人間によって営まれる言語および非言語行為であると見なされているが、このドラマティズムのアプローチではその枠組みそのもの自体を作り上げる事もレトリック行為であるとして、社会を見ることはレトリックを見ることとされる程レトリックを視座の中心に置いている。そしてこのドラマティズムは、20世紀のレトリック理論家である Kenneth Burke から派生してきている。そして、彼の人間観及び世界観がこの理論に深く根づいている。このようにドラマティズムのアプローチが他のアプローチと大きく異なる点は、運動に対する定義の違いであり、歴史的及び機能的アプローチでは他分野から社会運動の定義を借り入れてそれをそのまま取り入れているが、ドラマティズムのアプローチでは自ら社会運動についての定義を生み出し、それを用いていることにある。

1. 基本的な枠組み

Kenneth Burke の思想が根底にあるドラマティズムのアプローチでは、人間は本質的に各々異なっている、または分かれあっているという基本的な考えに立脚し、運動という枠組みの中でどのように人と人が結びつくのかに焦点を当てている。そして、人間としての「個」の本質から運動という「集団」を見ていくのである。そして全ての運動には「形相」(form)があると主張して、そこから運動の分析を始めているので、前述のように運動そのものの定義から出発しなくてはならない。この点に関して、当初歴史的アプローチを採っていたが後になってドラマティズムのアプローチに傾倒していった Leland Griffin は次のように述べている。

To study a movement is to study a drama, an Act of transformation, an Act that ends in transcendence, the achievement of salvation. It is to study the Scenes that bracket the Act,... It is to study the Agents that makes the Act; for men are actors, the makers, of movements.... It is to study the essentially human Agency that men use in the making of movements;... to study rhetoric.... And the purpose of all such study is to discover the motive,... or Purpose—of the movement.... And hence to study a movement is to study its

form.¹⁶⁾

このように「形相」という概念を枠組みとして、Burkeの説くドラマティズムの五要素 (dramatic pentad) —“act,” “scene,” “agent,” “agency” and “purpose”—を通して人間の行動、特に人間の動機について分析を試みる。そしてレトリックを“agency”と見て、この五要素間の相互作用の働きの中で特に“agency—scene”及び“agency—act”の組合せを重要視している。そして、Cathcartはレトリック行為として運動を理解するにあたって注意する点についてつぎのように述べている。

To understand movements as rhetorical acts constrained by a particular rhetorical form requires that we know something about how this form is exhibited, what are the forces that shape it and in turn are shaped by it, how does its work, and the reasons for its existence as form.¹⁷⁾

さらにこのドラマティズムのアプローチでは、人間が駆使する「言葉」の重要性については、他のどのアプローチよりも強く主張している。これは、人間が symbol—using animal”として考えられ、「言葉」が人間の行動を支配するからであるという基本的な考えが横たわっているからである。そして「言葉」を通して運動に現れてくるメッセージの中からその運動を規定するような「代表的な逸話」(representative anecdote)を取り出して検討していくものである。またその過程において、“agitator”と“counter—rhetor”との相互作用を調べていくことも大切であり、Robert Cathcartの強調する“dialectical enjoiment”を考察していくことがこのドラマティズムのアプローチでは重要になってくる。

2. レトリックの役割

レトリックとは単に出来事とか事件とかに対する反応 (response) ではなく、物事が起こった時における人間間の相互作用 (interaction) であり、そこでは生来的に分かれている人間間の分割を取り繕うもので、「理解」(understanding)を充足するような働きをする。従って、人間同志の「協力」(cooperation)が重要な鍵となってきて、その「協力」が形成されていく過程で「同一化」(identification)または、「同質化」(consubstantiality)がどのように駆使されていくのかに目を向ける必要が出てくる。言い換えれば、社会とは常に分かれていたり、または対立したりしている人間の集まりであり、その社会は絶えず進展し、動き続けているものであるという前提がある。そしてそこで起こる社会運動もしくは運動は対立のレトリックであり、疎外された人間のドラマである。¹⁸⁾

Griffinは、運動を三つの段階—“inception,” “crisis,” “consummation”—と分けて、その段階でのレトリック作戦 (rhetorical strategies) として、“Order, Guilt and Negation”—“Victimage and Mortification”—“Catharsis and Redemption”を提示してBurkeのドラマティズム (dramatism) をうまく援用して、分析のための理論的方法論を提示している。¹⁹⁾ また Robert,

Scott と Donald Smith は激しいまたは過激的な運動の作戦として四つのレトリック的理由—(a) “We are already dead.” (b) “We can be reborn.” (c) “We have the stomach for the fight; you don’t.” (d) “We are united and understand.”—を明示して、各々の理由がどのように充足されるのかを分析する。²⁰⁾

このドラマティズムで表されるレトリックは、他の方法論で見られるような議論 (argumentation) としてのレトリックとは異なって、言葉そのものに焦点を当てていくものである。つまり、運動において “rhetorical discourse” がどれだけ明確であり、かつ効力があるのかを検討していくのではなく、“rhetorical discourse が、人々の間でどのような意味をもってくるのが問題になってくるのである。さらに、社会運動の分析に関する他のアプローチからのレトリック批評においては “rhetorical truth” は、ある意味では状況と関係なく絶対的なものとして捉えられているが、このドラマティズムでは “rhetorical truth” は、あくまでも人間間の相互作用の過程の中で作り上げられていくものであると理解されている。²¹⁾

3. 運動のタイプ

前述のようにドラマティズムのアプローチにおいては、運動の定義は他分野から借り入れないで、独特の運動の定義を表している。運動とは対立のレトリックであり、既存の社会秩序から疎外された人間のグループが新しい価値・社会秩序を求めて、既存の価値・社会秩序を打破しようとするものであると定義づけている。またこれ程までの激しさがなければ、社会運動は従来のレトリック批評理論、つまり既存の社会秩序の枠組みの中でのレトリック批評理論で解釈できるが、現存している価値等を覆してしまう社会運動は Burke の提唱するレトリック批評理論—ドラマティズム—が有効であるとしている。言い換えれば、アリストテレス以来のレトリックはあくまでも既存の社会秩序を前提にしたものであるが、対立のレトリックはその範囲を超え、それらを打破するものであると説明している。

この点を事例研究で実証したのが Campbell の論文で、そこでは過激的な Black Nationalism の運動を取り上げ、従来のレトリック批評とドラマティズムの批評の両アプローチから分析して、ドラマティズムの批評理論の有効性を主張している。²²⁾ さらに、このドラマティズムのアプローチでは運動は人々のグループの活動であり、なんらかの組織員の行動といった観点から明らかにされるべきものではないと主張し、組織または構造を前提にする社会学とは相対する様相である。

IV 結 論

これまで、歴史的アプローチ (Historical Approach)、機能的アプローチ (Functional Approach) 及びドラマティズムのアプローチ (Dramatistic Approach) と、三つの代表的な方法論について、次の三つの観点から—(1)基本的な枠組み、(2)レトリックの役割、(3)分析の中で現れてくる運動のタイプ—検討してきたわけであるが、いまのところの方法論が非常に優れているのかという判断はできないのが現状である。

歴史という大きな時間の流れで運動を捉えていく試みは、ある単一の運動の始まりから終焉という一つのライフサイクルからの分析は運動の流れを理解する手助けにもなるし、複雑な運動の中でレトリックを見ることが出来る。しかし、この歴史的アプローチは理論を作り上げるには消極的であり、いまだ運動の独特のパターンが明らかにされていないので、より多くの運動の研究が大切であるとしている。また、このアプローチでは状況を誘発するような決定要因を提示していない、即ち、因果関係 (causation) の一般化がなされていない、その上運動がある段階から別の段階へ移行するときの「キッカケ要因」が出されていないので、ややもすると「自然史論」なる危険性をはらんでいる。それに反して理論の確立に意欲的な機能的アプローチはある意味では理解しやすいが、運動の定義または機能を社会科学、とくに社会学から援用しているので、社会学のゴールとレトリックが目指すものとを混同しやすい。また運動が活性化している間に付随して起こる様々なキャンペーンや組織団体をどのように、又はどの程度考慮していいのかという判断に困難さが付きまとう。またこのアプローチにおいても重要なのは各々の機能の特徴ではなくて、ある段階から別な段階へと運動が発達していく過程に注目することである。三つ目に検討したドラマティズムのアプローチでは、人間としての「個」の本質を集合体に当てはめようとしているが、集合体としての「個」の意識と、単なる個人としての「個」の意識を同じ次元で扱うと多少無理がかかってくるのではないだろうか。さらに、運動の定義についてもただ単に「対立」(confrontation) と主張するだけでは定義自体に曖昧さが残るし、また運動といっても全てが価値をひっくり返すような過激なものでもありえないので、「対立」という定義に疑問が残る。またこのドラマティズムのアプローチにおいては、その理論的枠組みまたはドラマティズムの構造が明確でなく、各研究者の洞察力に頼る所が大きい。

以上三つの方法論について簡単に評を述べたが、各々が様々な前提に基づき研究をすすめているわけであるが、従来の伝統的なレトリックと共通して異なる点は、大きな枠組みの中で運動を捉えようとしている事、及び、運動に対しての対立運動 (counter-movement) または対立行為 (counter-action) のことを考慮に入れている点である。今後の研究方向としては、まず「言葉」という面から社会運動は不即不離の関係であるということ、そしてレトリック観点からの社会運動の分析は運動の表面上の発達を見ていくのではなく、その発達の過程に焦点を当てなくてはならない。さらにこの運動の研究を広め、より深く追求していくためにはこれまでの西洋諸国における運動にだけ注目するのではなく、西洋という文化の枠を超えて東洋諸国における運動にも目を向ける必要がある。

本研究で考察した社会運動に関する論文 (年代順)

I. 歴史的アプローチ (Historical Approach)

[批評理論の研究]

Griffin, Leland M. "The Rhetoric of Historical Movements." *Quarterly Journal of Speech*, 38 (April, 1952), 184-188.

Smith, Ralph. "The Historical Criticism of Social Movements." *Central States Speech Journal*, 31 (Winter, 1980), 290–297.

[実践研究]

Lennon, James E. "The Pro-Northern Movement in England, 1861–1865." *Quarterly Journal of Speech*, 41 (February, 1955), 27–37.

Andrews, James R. "The Passionate Negation: The Chartist Movement in Rhetorical Perspectives." *Quarterly Journal of Speech*, 54 (April, 1973), 196–208.

Tapia, John Edward. "Circuit Chautauqua Program Brochures: A Study in Social and Intellectual History." *Quarterly Journal of Speech*, 67 (May, 1981), 167–177.

Oravec, Christine. "John Muir, Yosemite, and the Sublime Response: A Study in the Rhetoric of Preservationism." *Quarterly Journal of Speech*, 67 (August, 1981), 245–258.

Jurma, William E. "Moderate Movement Leadership and the Vietnam Moratorium Committee." *Quarterly Journal of Speech*, 68 (August, 1982), 262–272.

II. 機能的アプローチ (Functional Approach)

[批評理論の研究]

Simons, Herbert W. "Requirements, Problems, and Strategies." *Quarterly Journal of Speech*, 56 (February, 1970), 1–11.

Smith, Ralph R. and Russel R. Windes. "The Innovational Movement." *Quarterly Journal of Speech*, 61 (April, 1975), 140–153.

Smith, Ralph R. and Russel R. Windes. "The Rhetoric of Mobilization: Implications for the Study of Movements." *Southern Speech Communication Journal*, 42 (Fall, 1976), 1–19.

Stewart, Charles J. "A Functional Approach to the Rhetoric of Social Movements." *Central States Speech Journal*, 31 (Winter, 1980), 298–305.

[実践研究]

Martin, Howard H. "The Rhetoric of Academic Protest." *Central States Speech Journal*, 17 (November, 1966), 244–250.

Rude, Leslie G. "The Rhetoric of Farmer–Labor Agitators." *Central States Speech Journal*, 20 (Winter 1969), 280–285.

Gronbeck, Bruce E. "The Rhetoric of Social–Institutional Change: Black Action at Michigan." in *Exploration in Rhetorical Criticism* ed. Gerald Mohrmann, Charles Stewart and Donovan Ochs. University Park, Pa.:

Pennsylvania State University Press, 1973, pp. 96–113.

Barton, Stephen Nye and John B. O'leary. "The Rhetoric of Rural Physician Procurement Campaigns: An Application of Tavistock." *Quarterly Journal of Speech*, 60 (April, 1974), 144–154.

J. Robert Cox. "Perspectives on Rhetorical Criticism of Movements: Antiwar Dissent, 1964–1970." *Western Speech*, 38 (Fall, 1974), 254–268.

J. Robert Cox. "The Rhetoric of Child Labor Reform: An Efficacy–Utility Analysis." *Quarterly Journal of Speech*, 60 (October, 1974), 359–370.

Ⅲ ドラマティズムのアプローチ (Dramatistic Approach)

[批評理論の研究]

Griffin, Leland M. "A Dramatistic Theory of the Rhetoric of Movements." in *Critical Responses to Kenneth Burke*, ed., William H. Ruckert. Minneapolis: University of Minnesota Press, 1969, pp. 456–478.

Cathcart, Robert S. "New Approach to the Study of Movements: Defining Movements Rhetorically." *Western Speech*, 36 (Spring, 1972), 82–88.

Wilkinson, Charles. "A Rhetorical Definition of Movements." *Central States Speech Journal*, 27 (Summer, 1976), 88–94.

Cathcart, Robert S. "Movements: Confrontation as Rhetorical Form." *Southern Speech Communication Journal*, 43 (Spring, 1978), 233–247.

[実践研究]

Griffin, Leland M. "The Rhetorical Structure of the 'New Left's Movement, Part I." *Quarterly Journal of Speech*, 50 (April, 1964), 113–135.

Scott, Robert L. and Donald K. Smith. "The Rhetoric of Confrontation." *Quarterly Journal of Speech*, 55 (February, 1969), 1–8.

Campbell, Karlyn Kohrs. "The Rhetoric of Radical Black Nationalism: A Case Study in Self–Conscious Criticism." *Central States Speech Journal*, 22 (Fall, 1971), 151–160.

Hancock, Brenda Robinson. "Affirmation by Negation in the Women's Liberation Movement." *Quarterly Journal of Speech*, 58 (October, 1972), 264–271.

Hensley, Carl Wayne. "Rhetorical Vision and the Persuasion of a Historical Movement: The Disciples of Christ in Nineteenth Century American Culture." *Quarterly Journal of Speech*, 61 (October, 1975), 250–264.

Ilkka, Richard J. "Rhetorical Dramatization in the Development of American Communism." *Quarterly Journal of Speech*, 63 (December, 1977), 413–427.

Brumett, Barry. "A Pentadic Analysis of Ideologies in Two Gay Right Controversies." *Central States Speech Journal*, 30 (Fall, 1979), 250–261.

Conrad, Charles. "The Transformation of the 'Old Feminist' Movement." *Quarterly Journal of Speech*, 67 (August, 1981), 248–297.

Griffin, Leland M. "When Dreams Collide: Rhetorical Trajectories in the Assassination of President Kennedy." *Quarterly Journal of Speech*, 70 (May 1984), 111–131.

Lake, Randall A. "Order and Disorder in Anti-Abortion Rhetoric: A Logological View." *Quarterly Journal of Speech*, 70 (November, 1984), 425–443.

注

- 1) Dan F. Hahn and Ruth M. Gonchar, "Social Movement Theory: A Dead End," *Communication Quarterly*, 28 (Winter 1980), 60–64; "Studying Social Movements: A Rhetorical Methodology," *Speech Teacher*, 20 (January 1971), 44–52.
- 2) Leland M. Griffin, "The Rhetoric of Historical Movements," *Quarterly Journal of Speech*, 38 (April 1952), 184–188.
- 3) James E. Lennon, "The Pro-Northern Movement in England, 1861–1865," *Quarterly Journal of Speech*, 41 (February 1955), 27–37.
- 4) James R. Andrews, "The Passionate Negation: The Chartist Movement in Rhetorical Perspective," *Quarterly Journal of Speech*, 54 (April 1973), 208.
- 5) James Lennon, pp. 27–37.
- 6) James Andrews, p. 208.
- 7) Charles J. Stewart, "A Functional Approach to the Rhetoric of Social Movements," *Central States Speech Journal*, 31 (Winter 1980), 299.
- 8) *Ibid.*, pp. 300–301.
- 9) Ralph R. Smith and Russel R. Windes, "The Innovational Movement," *Quarterly Journal of Speech*, 61 (April 1974), 144–154.
- 10) Herbert Simons, "Requirements, Problems, and Strategies," *Quarterly Journal of Speech*, 56 (February 1970), 1–11.
- 11) Bruce E. Gronbeck, "The Rhetoric of Social-Institutional Change: Black Action at Michigan," in *Exploration in Rhetorical Criticism*, ed. Gerald Mohrmann, Charles Stewart and Donovan Cchs (University Park, Pa.: Pennsylvania State University Press, 1973), pp. 96–113.
- 12) Neil J. Smelser, *Theory of Collective Behavior* (New York: The Free Press, A Division of Macmillan Publishing Co., Inc., 1962), pp. 131–381.
- 13) Smith and Windes, pp. 144–154.
- 14) Leslie G. Rude, "The Rhetoric of Farmer-Labor Agitators," *Central States Speech Journal*, 20 (Winter 1969), 280–285.
- 15) Herbert Simons, pp. 1–11.
- 16) Leland M. Griffin, "A Dramatistic Theory of the Rhetoric of Movements," in *Critical Responses to Kenneth*

Burke, ed. William H. Ruckhrt (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1969), p. 462.

- 17) Robert S. Cathcart, "Movements: Confrontation as Rhetorical Form," *Southern Speech Communication Journal*, 43 (Spring 1978), 233.
- 18) *Ibid.*, p. 233.
- 19) Leland M. Griffin, "A Dramatistic Theory of the Rhetoric of Movements," pp. 456–478.
- 20) Robert L. Scott and Donald K. Smith, "The Rhetoric of Confrontation," *Quarterly Journal of Speech*, 55 (February 1969), 1–8.
- 21) Karlyn Kohrs Campbell, "The Rhetoric of Black Nationalism: A Case Study in Self-Conscious Criticism," *Central States Speech Journal*, 22 (Fall 1971), 151–160.
- 22) *Ibid.*, pp. 151–160.